

アメリカ学会会報

— The American Studies Newsletter —

No.202

April 2020

Charvat 再び／Charvat を越えて — 経済営為と文学研究の接点 —

林 以知郎

形成期のアメリカ小説研究においてこの数年間の成果のひとつと言えるのは、Wayne Franklin による James Fenimore Cooper 伝 (2007 年, 2017 年) の刊行をみたことであろう。二巻 1500 ページに及ぶ浩瀚な評伝の完成は Cooper 研究者にとって朗報であったが、それ以上に着目したいのは、評伝の中心的な構成原理となったのが「経済営為」(“economics”) であったとされていることである。その言葉通り、ミズーリ協定成立の年から 1850 年の妥協に至る時間幅の間で克明にたどられるのは、萌芽段階にあった市場社会および形成期の出版業界事情、さらに未成熟な読者層形成というアンテベラム期の時代状況にあって、職業作家という主体を立ち上げていこうとするロマンス作家の手さぐりの模索の過程である。著作権の確保からはじまり製本から流通に至る出版業者との契約交渉、印税や先付け見積りなど出版経済営為の厚い事実記述とロマンス執筆の営みの間に双方向的な働きかけ関係を見とっていく Franklin の手法が、半世紀も以前にこの研究領域を切り開いた William Charvat に範を求めていることは明らかであろう。Charvat の主著 *Literary Publishing in America, 1790-1850* の出版から数えて昨午が 60 年目であったことに気づくとき、そして 1980 年代から顕著となっていた文学史の書き換えの企てが帰着した地平のひとつが、例外主義の上に立った声高なアメリカ文化論と新批評の時代において Charvat がひとり見据えていた方向であったことに気づくとき、「早く来すぎた」この開拓者の異能ぶりにあらためて思いを馳せざるをえない。

その Charvat の主著出版から 40 年を記念して編まれた批評論集 *Reciprocal Influences* の巻末論文で Michael T. Gilmore が示唆しているように、現在の時点からこの知の開拓者が残していった業績を眺め返してみるならば、方法上の斬新さとともに、時代の思想的構図に根差した限界もまた浮かび上がってくる。Charvat にとって Cooper は、アメリカ小説形成期にあって唯一「職業作家」の要件を満たしうるモデル的存在であったと同時に、出版経済の営為から文学テキストの生成を読み解こうとする彼の批評視座がはらむ限界を浮かび上がらせてしまう

躡きの石であった。1837 年の恐慌から 100 周年の年に左派系雑誌に寄稿された論文“American Romanticism and the Depression of 1837”は彼の批評手法を典型的にうかがわせてくれる論考であるが、その主たる論点は、Cooper に代表されるロマン派作家の作品には恐慌への言及・表象化が欠落している、という批判である。出版社にとって看板作家として契約と印税面で破格といえる優遇を与えられていた Cooper は、「特権の階層」にあったがゆえに恐慌が喚起した社会不安の情動から無縁でありえた、という Charvat の分析からは、具体的事実としての経済のみに限定しようとする狭さと、Parrington を経由した革新主義の残滓に根差した硬直した階層批判が透けて見えないだろうか。

Franklin の評伝が試みようとするのは、Charvat が分析の対象としていた、印税額や出版部数といった具体的な経済営為の形をとりはしないものの、訴訟と中傷合戦に明け暮れたこのロマンス作家の対社会的身置きや孤立感、失敗の感覚などの情動と身振りの中に「埋め込まれている」、「時代が共有した経済をめぐる深い不安」を掘り上げることであろう。この観点から捉えなおすならば、「持たざる者」として異なった意味で恐慌から距離を保ちえた Edgar Allan Poe が偏愛した「崩壊」の感覚と、Cooper の冒険ロマンスにおいて反復される「墜落」の感覚に同質の「不安」を見とって、Jessica M. Lepler の好著の題名を援用する形で「1837 年恐慌の様々な表われ」を捉えてみることも可能であろう。M・ウェーバーの職業概念への忠実さと、Gilmore の言葉を借りれば「マルクス主義との戯れあい」ゆえに限界をはらみこまざるをえなかった Charvat の狭義の経済営為を把握を越えて「多様な経済」(Leon Jackson) へ、さらには女性の書き手をも射程に収めた「作家」主体の多様性へと開いていく試みは今世紀に入って豊かな成果をもたらし始めている。あらゆる開拓者的存在がそうであるように、William Charvat が残した業績もまた、継承されつつ越えられていくのである。

(同志社大学)

2020年3月21日

新型コロナウイルスを取り巻く現状を踏まえた アメリカ学会第54回年次大会の扱いについて

アメリカ学会常務理事会は、3月20日に緊急の会合を開き、新型コロナウイルスが世界的に感染拡大している中、北海道大学の関係者の方々はもとより参加予定者の皆様の健康と安全を最優先に考え、2020年6月13日～14日に北海道大学にて予定されていた年次大会の開催を見送ることいたしました。準備を進めてくださっていた北海道大学の関係者の方々、そして、参加を予定されていた皆様に多大なご迷惑をおかけすることを、お詫び申し上げますとともにご理解を賜りますようお願い申し上げます。

常務理事会としては引き続き、状況の推移を見守り、代替的な措置を含めて検討いたします。この点を含め、詳細はアメリカ学会のウェブサイトおよびメーリングリストでお伝えしてまいりますので、ご注意くださいようお願いいたします。
アメリカ学会常務理事会

* 本件に関するお問い合わせは、アメリカ学会年次大会企画委員会 (program@jaas.gr.jp) までお願いいたします。

Special Notice regarding the JAAS 2020 Annual Conference

March 21, 2020

Dear Colleagues,

We regret to inform you that the JAAS Executive Board voted to not hold the JAAS 2020 Annual Conference at Hokkaido University, Sapporo, Japan on June 13-14 as originally scheduled. The challenges presented by the evolving COVID-19 epidemic have adversely impacted projected attendance. They have also severely disrupted travel, both domestic and international, and seriously hampered our ability to hold a large public gathering. We are grateful to the JAAS members and partners at Hokkaido University and the Conference Program Committee for all their efforts and hard work and apologize for any inconvenience this change of course may cause to those of you who had planned to attend the 2020 annual meeting. We will continue to monitor developments and pursue the possibility of an alternative occasion. Details regarding this and future changes in plans will be provided on the JAAS website and through the association mailing list.

Executive Board, JAAS

* For inquiries, please contact the JAAS annual meeting organizing committee at program@jaas.gr.jp.

なお、北海道大学で予定されていた年次大会のプログラムは、以下のとおりです。

2020年アメリカ学会第54回年次大会プログラム

第1日

午前部

自由論題 * タイトルの日英別は発表言語によるものです。

【Session A アメリカの政治と対外関係 U.S. Politics and Foreign Relations】

Chair: Toshihiro MINOHARA 蓑原俊洋 (Kobe University 神戸大学)

Discussants: Haruo IGUCHI 井口治夫 (Kwansei Gakuin University 関西学院大学)

Takakazu YAMAGISHI 山岸敬和 (Nanzan University 南山大学)

Jelena GLISIC (Research Institute for Indo-Pacific Affairs, Kobe インド太平洋問題研究所)

“The Road from San Francisco: Japan’s Reestablishment of Post-World War II Diplomatic Relations”

Tomoaki HAGITO 萩藤大明 (Research Institute of Peace and Security, Tokyo 平和・安全保障研究所)

“Toward a More Equal Partnership: Formation and Maturation of the U.S.-Japan Relationship under President John F. Kennedy”

Mario REWERS (Vanderbilt University)

“An Association for the Nation: The ASA and the Paranoid Style in American Studies”

Matthew FILNER (Metropolitan State University)

“The Future of Liberal Democracy in America: The Trump Presidency and the 2020 Presidential Election”

【Session B トランスナショナルなアメリカ文化史 Transnational U.S. Cultural History】

司会：南川文里（立命館大学） 討論：南川文里、前川玲子（京都大学・名）
内田大貴（慶応義塾大学・院）「彼と仲間たち—批評家ウラジーミル・ナボコフとニューヨーク知識人」
青木深（東京女子大学）「アメリカにおける日本の軽業・曲芸 1894-1941—ある文化越境の歴史をめぐる試論」
山下靖子（津田塾大学）「アメリカの沖縄占領期における「逆」戦争花嫁—支配国と占領地の懸け橋となった一人の女性、ワンダラー・川平に関する一考察」
大賀瑛里子（ハワイ大学マノア校・院）「日本におけるフラと震災復興—福島県いわき市とハワイ州カウアイ郡の交流の事例」

【Session C アメリカ文化への新しい視座 New Perspectives on American Culture】

Chair: Hisayo OGUSHI 大串尚代（Keio University 慶応義塾大学）
Discussants: Hisayo OGUSHI, Yukihiro TSUKADA 塚田幸光（Kwansei Gakuin University 関西学院大学）
Ann OSTENDORF（Gonzaga University）
“Gypsies and Roma in American Studies: Scholarly Absence, Fictive Presence, and Historical Disappearance”
Mathieu DEFLEM（University of South Carolina）
“Law and Celebrity in American Popular Culture: Litigating Women of Pop”
Jiro MORISHITA 森下二郎（Waseda University GS 早稲田大学・院）
“Vitalism, Anti-Work and After”
Sang-keun YOO（University of California-Riverside）
“Socioenvironmental Critique to Necropolitical Capitalism in Bong Joon-ho’s The Host and Parasite”

【Session D アメリカ国家と社会 The American State and Society】

司会：中野博文（北九州市立大学） 討論：中野博文、山澄享（椋山女学園大学）
杉湖忠基（一橋大学・院）「再建期におけるサウスカロライナ州のクー・クラックス・クラン裁判と政治の行方」
相川裕亮（慶応義塾大学）「ビリー・グラハムと核問題」
阿部碧（一橋大学・院）「ベトナムにおける「アメリカ市民」による焼身行為の記憶のされ方—戦争証跡博物館の展示から「アメリカ市民」のイメージを探る」
佐原彩子（大月市立大月短期大学）「冷戦人道主義の二つの「逆説」」

【Session E アメリカの企業と経済政策 American Business and Economic Policies】

司会：上野継義（京都産業大学） 討論：上野継義、名和洋人（名城大学）
宗像俊輔（一橋大学・院）「鉄道がつくった近代企業の労務管理体制—「大陸横断鉄道」における従業員名簿の作成と労働者教育の実施」
奥広啓太（千葉大学）「1939年政府再編法と「国防期」経済動員」
須藤功（明治大学）「戦後アメリカ対外援助政策の転換点—ドレイパー委員会報告に着目して」
大橋陽（金城学院大学）「現代アメリカ消費者信用史における融資差別是正と規制緩和の方向性」

【Session F アメリカとアジア The United States and Asia】

Chair: Moteo SASAKI 佐々木一恵（Hosei University 法政大学）
Discussants: Moteo SASAKI, Hisae ORUI 大類久恵（Tsuda University 津田塾大学）
Ayuko TAKEDA 竹田安裕子（University of California-Irvine GS）
“Chains of Incarceration: Camp Susupe and Japanese American Concentration Camps”
Yi-Hung LIU（Academia Sinica, Taipei）
“Cold War Divide and Connection: War and Peace in Iowa City, 1941-1988”
Bruce P. BOTTORF（Kansai Gaidai University 関西外国語大学）
“American Military Chaplains in Vietnam: Covenant Nation in Moral Crisis”
Mari N. CRABTREE（College of Charleston）
“Memories Lost and Found: Robert F. Williams, Afro-Asian Political Solidarity, and the Photograph”

午後の部

第一部 会長講演

Chair: Yoshiko UZAWA 宇沢美子（Vice President, JAAS/Keio University 慶応義塾大学）
Keynote speech: “Transgender Students and New Admission Policies of the Historically Significant Women’s Colleges in the 21st Century America and Japan”
Yuko TAKAHASHI 高橋裕子（President, JAAS/Tsuda University 津田塾大学）
Roundtable “Envisioning the Future of Higher Education in Asia and the United States”
Scott KURASHIGE（President, ASA/University of Washington）

Jae H. ROE (President, ASAK/Sogang University)
Yuko TAKAHASHI

第二部 シンポジウム「表現の自由と不自由のあいだ」

司会：小林剛（関西大学）

報告：横大道聡（慶応義塾大学）「アメリカにおける表現の自由の現在」

梅崎透（フェリス女学院大学）「『自由』と『憎悪』のあいだで—言論の自由をめぐる 1960 年代以降の政治文化」

加治屋健司（東京大学）「表現と芸術のあいだ—アメリカにおける『芸術の自由』」

大和田俊之（慶応義塾大学）「ペアレンタル・アドバイザリー—アメリカの音楽と検閲」

吉本光宏（早稲田大学）「思考実験としての想像力—ポピュリズム時代の日米映画」

第 2 日

午前の部

部会・ワークショップ

【WORKSHOP A Queer Futurities: Utopias, Dystopias and Disruptive Transnationalism: Gender, Environment and Religion I】

Chair: Kazuto OSHIO 小塩和人 (Sophia University 上智大学)

Discussant: Masami YUKI 結城正美 (Aoyama Gakuin University 青山学院大学)

Presenters:

Shelly STEEBY (ASA/University of California, San Diego) “Queer Ecologies, Speculative World-Making, and Transnational Environmental Justice”

Erik LOOMIS (OAH/University of Rhode Island) “Oregonians and Indian Gurus: The Controversy over Rajneeshpuram Within the Context of the Pacific Northwest’s Political and Economic Transformation in the 1980s”

Presenter 3: Keita HATOOKA 波戸岡景太 (JAAS/ Meiji University 明治大学)

【部会 A 北海道とアメリカ合衆国における移植された文化と近代社会システムの構築】

司会：土田映子（北海道大学） 討論：水谷裕佳（上智大学）

報告：清水佳里（北海道大学）「ハワイと北海道の神社に見る近代性と世俗性」

高野誠二（東海大学）「北海道とアメリカにおける開拓地型の「鉄道町」の都市プランの相違」

ジェフリー・ゲーマン（北海道大学）「アメリカと北海道における先住民政策の比較検討」

【部会 B 銃社会アメリカの過去と現在】

司会：肥後本芳男（同志社大学） 討論：西山隆行（成蹊大学）

報告：富井幸雄（東京都立大学）「修正第 2 条の位相」

藤永康政（日本女子大学）「抵抗／暴力—公民権運動・ブラックパワー運動における武装自衛論」

永富真梨（摂南大学）「1960 年前後のポピュラー音楽における〈ガンマン〉に関する考察—マーティン・ロビンズ、ジョニー・キャッシュ、ボニー・ディッドリー、ソニー・ロリンズの作品を例として」

【部会 C アメリカン・ファミリー：多様化する家族の相貌】

司会：古井義昭（立教大学） 討論：豊田真穂（早稲田大学）

報告：菅（七戸）美弥（東京学芸大学）「センサスにみる家族／世帯のかたち—1870-1880 年の日本人移住者を事例として」

関口洋平（東京都立大学）「ホモ・エコノミクスと動物と家族—レイモンド・カーヴァーの『ジェリーとモリーとサム』を読む」

菅野優香（同志社大学）「クィア・シネマにおける「家族」の再創造」

分科会（内容については、下記「分科会のご案内」をご覧ください）

午後の部

部会・ワークショップ

【WORKSHOP B Queer Futurities: Utopias, Dystopias and Disruptive Transnationalism: Gender, Environment and Religion II】

Chair: Rui KOHIYAMA 小檜山レイ (Tokyo Christian Women’s University 東京女子大学)

Discussant: Keiko NITTA 新田啓子 (Rikkyo University 立教大学)

Presenters:

Martin MANALANSAN (ASA/University of Minnesota) "Atopias: Queering Mess, Mesh and Migrancy"
Farina Noelani KING (OAH/Northeastern State University) "'Art Pulled Me Out': Diné Expressions of Hózhó at Intermountain Boarding School, 1950-1984"
Yuki TAKAUCHI 高内悠貴 (JAAS/University of Tokyo 東京大学)

【部会 D アメリカ第一主義を再考する】

司会：遠藤泰生（東京大学） 討論：西崎史子（同志社大学）
報告：中山俊宏（慶応義塾大学）「現代的アメリカ・ファーストの知的背景」
三牧聖子（高崎経済大学）「反戦思想としてみた「アメリカ第一主義」—歴史的検討」
平田雅己（名古屋市立大学）「アメリカ第一主義再考—帰還兵による反戦運動の視点から」

【部会 E Unpredictable Agents: The Making of Japan's Americanists during the Cold War and Beyond】

Chair: Mari YOSHIHARA 吉原真里（University of Hawai'i ハワイ大学）
Discussant: Sayuri SHIMIZU 清水さゆり（Rice University ライス大学）

Presenters:

Katsunori YAMAZATO 山里勝己（Meio University 名桜大学）"Memories of an Okinawan Americanist"
Eijun SENAHA 瀬名波楽潤（Hokkaido University 北海道大学）"American Paralysis: Floating Homeland, Family, and Masculinity"
Yujin YAGUCHI 矢口祐人（University of Tokyo 東京大学）"Settler Colonialism in Japan and the US: A Hokkaido Native Turned an Americanist"
Yuko ITATSU 板津木綿子（University of Tokyo 東京大学）"The Protean Utility of American Values"
Sanae NAKATANI 中谷早苗（Tokyo Metropolitan University 東京都立大学）"The Land She Could Never Call Home Again: 'America' in My Family History"
Yu TOKUNAGA 徳永悠（Kyoto University 京都大学）"Making of a Transpacific Americanist via Latin America"

第 54 回年次大会 分科会のご案内

1. 「アメリカ政治」 責任者：宮田智之（帝京大学）tomoyukimiyata@main.teikyo-u.ac.jp

報告：中橋友子（尚美学園大学・講）「2016 年大統領選挙における、トランプの営業技術」
松本明日香（同志社大学）「トランプ政権の危機対応—対北朝鮮と対イランを比較して」
西住祐亮（中央大学・講）「2020 年民主党予備選とアメリカ外交」

本年度のアメリカ政治分科会は、3名の会員より、アメリカ政治の各分野における最新の研究成果を報告いただく。中橋会員は、「トランプ固有の属性」と捉えられがちなトランプの言動や行動について、実はビジネスマンの技術や慣習に由来するものが多々あることを 2016 年大統領選挙の初期に焦点を当てることで明らかにする。松本会員は、トランプ政権の危機対応メカニズムについて取り上げ、国際情勢の変化、国内世論、大統領の言説、そして政策決定過程などに着目することで、北朝鮮とイランへの対応を比較分析する。西住会員は、今日のアメリカ政治の特徴として、政党間の対立とともに党内対立が高まってきておりそうした亀裂が外交論にも顕著に現れていることを、2020 年民主党予備選挙を事例として明らかにする。

2. 「アメリカ国際関係史研究」 責任者：水本義彦（獨協大学）mizumotoy@hotmail.com

報告：志田淳二郎（東京福祉大学）「ドイツ統一と NATO 東方拡大問題—ジョージ・H・W・ブッシュ政権の認識と実践」

近年の米ロ関係／NATO・ロシア関係の悪化の原因として言及されるのが、NATO 東方拡大である。ロシアは、ドイツ統一交渉時に、統一ドイツを NATO に加盟させる代わりに、アメリカはソ連に NATO を東方拡大させないことを約束したとし、約束を破り、NATO を東方拡大させたアメリカを非難している。近年の、とりわけ米英における冷戦研究では、ドイツ統一交渉時に、このような約束が存在していたかの精査が行われている。本報告では、先行研究と未公開資料を駆使し、ジョージ・H・W・ブッシュ政権がドイツ統一交渉時に統一ドイツの NATO 加盟問題および NATO 東方拡大をどのように認識し、実践したかについて検討する。本報告は、少なくとも、ドイツ統一交渉時に、地政学的発想と現実主義を重視するブッシュ政権中枢で、NATO 東方拡大の用意がされていなかったことを示す。

本報告に対し、森聡会員に討論していただく。

3. 「日米関係」 責任者：末次俊之（専修大学）suetoshi007@gmail.com

報告：小伊藤優子（国立研究開発法人日本原子力研究開発機構）「原子力依存度低減期にみる日米関係」

東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所事故は、原子力利用に対する日本国民の関心を高めることになった。日本政府が原子力への依存度を低減する方針を示す中で、1950年代からエネルギー安定供給のため進められてきた高速増殖炉の研究開発は停滞している。2016年12月に政府は、高速増殖原型炉もんじゅ（以下、「もんじゅ」と略記）の廃止措置を決定した。日本の高速増殖炉は、アメリカを盟主とする西側諸国と協力しつつ進められてきた。特に、財政的事情から高速炉開発の中断及び施設の閉鎖を余儀なくされたイギリスは、「もんじゅ」を、自国の技術維持と核不拡散に資するプルトニウム管理技術を確立するためのプラントとみなしていた。本報告では、「もんじゅ」駐在経験のある海外技術者にインタビューした結果を踏まえて、日本の高速炉開発が、アメリカの核不拡散体制に与える影響について考察する。その上で、原子力への依存度低減を目指す日本の将来社会における課題を提示したい。

4. 「経済・経済史」 責任者：名和洋人（名城大学） nawa@meijo-u.ac.jp

報告：手塚沙織（南山大学）「トランプ政権の移民政策—移民政策の政治的変遷における位置づけ」

トランプ米大統領は、その過激な発言から、人種差別主義者や白人至上主義者であるなどと批判を受け、トランプの移民政策にも似たような非難が相次ぐ。だが、トランプの移民政策は、移民政策をめぐる政治的変遷から見ても、乖離し、差別主義的であるのだろうか。本報告の目的は、トランプ政権の移民政策が、歴代の政権のそれと比較して、乖離しているのか否かを検証することである。本報告では、まず移民・不法移民に関するデータを用いて、現状を把握し、世論の認識を分析した上で、トランプ政権の移民政策を概説する。次に、トランプ政権の発足以前の移民・不法移民に対する歴代政権の政策を概観した上で、トランプのそれと比較し、それがいかに乖離している（いない）のかを検証する。

5. 「アジア系アメリカ研究」 責任者：野崎京子（京都産業大学・名） kyoko.nozaki.103039@gmail.com

報告：野崎京子（京都産業大学・名）「ファミリー・ヒストリーから見た日系人強制収容」

戦争中の数年間、社会から追い出され隔離された日系人の体験—その傷跡は80年近く経った今も消えてしまったわけではない。時代の狭間で生きた父と母の世代—その目撃者としての証言を記録し「歴史の記憶」として留め、その意味について考察する。

6. 「アメリカ女性史・ジェンダー研究」 責任者：鈴木周太郎（鶴見大学） shutarosuzuki@me.com

報告：箕輪理美（東京福祉大学）「『自由な愛』はなぜ問題なのか？—19世紀アメリカにおけるフリーラブをめぐる論争」

1850年代のアメリカで生まれたフリーラブ運動は、結婚やセックス、そして自由の意味を再構築し、男女平等を実現しようとするラディカルで画期的な試みだった。しかし、この運動が大衆的な出版文化の中で大々的に取り上げられ批判を受けるようになるにつれ、「フリーラブ」という言葉は一人歩きを始め、当時の様々な政治的論争の中に登場するようになった。そこでは、「フリーラブ」は支持者たちが定義していたものとは異なる意味を付与され、（しばしば運動と全く関連のない）様々な人々を中傷するために使われた。本報告では、報告者の博士論文での議論を概観し、1850～80年代のアメリカ社会一般で流布していた「フリーラブ」の表象を紹介することを通じて、いかに結婚やジェンダー、セクシュアリティについての言説が政治的論争の中心要素であったかということ論じたい。

7. 「アメリカ先住民研究」 責任者：佐藤円（大妻女子大学） mdsato@otsuma.ac.jp

報告：野口久美子（明治学院大学）「カジノ時代のアメリカ先住民」

コメンテーター：川浦佑知子（南山大学）

本分科会では、アメリカ先住民のカジノ産業について、その歴史的背景と現代先住民社会への影響という二つの観点から考える。2018年現在、アメリカ合衆国が承認する573部族のうち、28州にまたがる241部族が501のカジノ施設を運営している。同年、その総売り上げは3.4兆円と過去最高を記録した。アメリカ先住民によるカジノ産業は一部の「リッチインディアン」を生み出したのみならず、保留地で自治を担う先住民部族と地域、州、国家の新たな関係性をも作り出してきた。報告では、野口久美子『インディアンとカジノ』（筑摩書房、2019年）からカジノ産業をめぐる議論や事例を紹介しつつ、同産業が急展開を見せた1978年以降を「インディアン・カジノ時代」と位置づけて、アメリカ史におけるその歴史的、現代的意義を考える。

8. 「初期アメリカ」 責任者：笠井俊和（群馬県立女子大学） toshi_ks@mail.gpwu.ac.jp

報告：塚田浩幸（東京外国語大学・院）「近世アメリカにおけるセトラー・コロニアリズムと複合君主政—グレーター・ブリテンのなかのグレーター・ホデノショニ」

グレーター・ブリテンは、グレーター・イングランド、グレーター・スコットランド、グレーター・アイルランド、（グレーター・ウェールズ、）そして、グレーター・ホデノショニの集合体である。17世紀半ばから18世紀半ばまでの時期において、ブリテン帝国は、ホデノショニを結合することによって、そして、ホデノショニの指導者と協調することによって、領域を拡大させ、また、統治を行なった。その帝国のすがたは、近世ヨーロッパの複合君主政に、それとはまったく無縁のアメリカ先住民の複合体制を連結したものだ。本報告は、先住民のプレゼンスの大きさに着目してきたここ30年の初期アメリカ史研究と、初期アメリカにも進出しつつあるセトラー・コロニアリズム論の双方をふまえたうえで、それらを折衷する新たな歴史像として複合君主政の物語を提示したい。

9. 「文化・芸術史」 責任者：小林剛（関西大学）go@kansai-u.ac.jp

報告：森川智成（ハワイ大学マノア校・院）「戦場としての博物館」

渡部宏樹（筑波大学）「第二次大戦前のカリフォルニア農業共同体の「日本人ホール」における日系移民の映画上映と文化活動」

今回の分科会では「文化的体験と想像の共同体」をテーマにして二人の研究者に報告を行ってもらおう。森川智成氏は、ニューヨーク・ロウアーマンハッタンの世界貿易センター跡地に建てられ、2014年に一般に向けてオープンした国立9.11博物館において観覧者に提示されているナラティブを詳細に分析することによって、その展示空間が果たしている国家のイデオロギー装置としての役割、つまりこの空間がその展示によってどのようにアメリカ国民を国家に寄与する国民として組織しようとしているのかを明らかにする。また、渡部宏樹氏は、1910年代から20年代にかけて盛んに建設された「日本人ホール」と呼ばれる施設とそこで行われていた文化活動の姿を、サンフランシスコとロサンゼルスで発行されていた邦字新聞をもとに浮かび上がらせることによって、日系移民の映画をはじめとする文化活動の歴史を考える際の農業共同体の重要性を議論する。SNS等を通じてパッケージ化された文化的体験が生産、流通、消費される時代に、そうした疑似イベントがどのような「想像の共同体」を創出しているのかという今日的問題を考察するうえでも非常に意義深いセッションになるはずである。

10. 「アメリカ社会と人種」 責任者：戸田山祐（大妻女子大学）tasukutodayama@hotmail.com

報告：上杉忍（横浜国立大学名誉教授）「拙著『ハリエット・タブマン―「モーゼ」と呼ばれた黒人女性』（新曜社、2019年）と映画『ハリエット』（ケイシー・レモンズ監督）をめぐって」

報告者が昨年春に出版した『ハリエット・タブマン―「モーゼ」と呼ばれた黒人女性』（新曜社）の成立過程と、それが、近年のアメリカにおける黒人奴隷制研究のいかなる成果を反映しているのかについていくつかの点に絞ってお話します。また、今年3月末から日本で全国上映された（アメリカでは昨年11月）映画『ハリエット』について、その史実との食い違いとその意味なども含めてコメントしたいと思います。

そして、なにゆえに今日のアメリカで「ハリエット・タブマン」の肖像を20ドル紙幣に掲載することが連邦政府財務省から提案され（2016年）、トランプ政権の下でそれがペンディングされているのかについて考え、今日のアメリカの「多文化主義」の落とし穴についても考察してみたいと思います。

そして最後に、一般読者を引き付ける「歴史書」を書くためには、どのような工夫が必要なのか、皆さんと共に考えることができれば幸いです。

第55回年次大会企画・報告募集のお知らせ

アメリカ学会第55回年次大会は、2021年6月に慶応義塾大学にて開催の予定です。大会での自由論題報告と部会企画提案を、下記の通り募集します。

会員のみならずからの積極的な応募をお待ちしております。すべての応募は年次大会企画委員会（program@jaas.gr.jp）宛に、1～3のうち該当する件名を明記し、それぞれの締切日厳守でお申し込みください。

1. 「自由論題報告申し込み」（締切日：11月20日）

報告タイトル、1,500字程度の要旨、およびキーワード5つを記載。

自由論題での報告は、海外在住の場合（下を参照）を除き、会員に限られます。非会員による申し込みは、締め切り日までに入会手続きを行っている場合のみ、応募内容を暫定的に受理し、入会が認められた時点で正式に審査対象とします。

（海外在住の非会員）海外在住の方（国籍を問わない）は、非会員のままで自由論題での発表が可能です。ただし、報告が決定した場合は、2021年3月1日までに大会参加費8,000円の支払いが必要となります。大会参加費は返金不可となっておりますのでご了承ください。報告申し込み、参加費支払いのいずれも、締め切りは日本標準時です。

報告内容は未発表のものとし、要旨に基づいて審査の上、報告の可否を通知いたします。報告者には2021年5月15日までにペーパー（和文の場合、8,000字～12,000字、英文の場合、5,000～7,500 words程度）を提出していただき、学会のホームページに掲載します。学会員にはパスワードを通知し、年次大会の前後2週間のみペーパーを掲載します。また、英語での報告の場合は、要旨・タイトルは英語としてください。なお、第55回の自由論題の報告者は、2020年6月における第54回大会の取りやめ（延期）によって発表できなかった方を優先させていただきますので、ご了承ください。詳細は今後改めて発表いたします。ご不便をおかけいたします。

自由論題の発表者について、パネル形式の応募も認めております。詳細は年次大会企画委員会にお問い合わせください。

2. 「部会の企画提案」（締切日：9月6日）

部会のテーマおよび800字程度の要旨。報告者案があれば合わせてご提案ください。部会の企画に関しては、以下の申し合わせ事項にご留意ください。第53・54回大会の部会・シンポジウム・ワークショップでの報告者は、第55回大会の部会では報告できません。司会者、討論者としての応募も原則として避けてください。登壇者の過半数は学会員で

あることとします。司会者には大会までの連絡調整などをお願いするため、原則学会員としてください。非会員の部会登壇者に対して、学会から謝金・交通費などは支払われませんので、ご了承ください。また、登壇者の構成については、ジェンダーや地域の多様性にできるだけ配慮して下さい。学際性のある企画を歓迎しますが、必ずしもそれを条件とはいたしません。若手会員の積極的な応募を歓迎いたします。

3. 「分科会開催申し込み」(締切日：8月31日)

新規の場合は、分科会趣旨(400字以内)と、連絡責任者および賛同者5名の氏名をお知らせ下さい。継続の場合にも、分科会責任者の氏名を添えて、継続する旨をご連絡ください。

なお、全ての企画内容の最終決定は、年次大会企画委員会の提案に基づいて常務理事会で行います。応募された内容に関して調整をさせていただく場合があることを、あらかじめご了解ください。

年次大会企画委員会

アメリカ学会海外渡航奨励金 — 国外の学会やシンポジウムで発表する方を対象とする助成制度のご案内 —

このたびアメリカ学会では、国外での学会やシンポジウムにて発表する方を対象に、以下の要領で渡航奨励金を支給することになりました。本制度による給付を希望する方は積極的にご応募ください。

1. 応募資格：

- ① アメリカ学会の会員であり、年会費の滞納がないこと。
* 応募時にアメリカ学会への入会手続中である場合はその旨明示すること。
- ② 国際学会やシンポジウムでの発表時に、日本に在住し、日本からの旅費を要すること。
- ③ 発表内容がアメリカ研究に関するものであること。
- ④ 大学院生等の若手研究者を優先的に検討し、そのほか、助成の必要性、発表の内容を総合的に判断する。

2. 審査基準：

- ① 大学院生等の若手研究者を優先する。大学院生については発表をしない場合も応募可能。
- ② American Studies Association, American Studies Association of Korea, Organization of American Historians のいずれかの年次大会で発表する方を優先するが、これら以外の国際学会やシンポジウムで発表する場合も応募できる。
- ③ 他組織からの援助のないものを原則として優先する。
- ④ そのほか、助成の必要性、発表の内容を総合的に判断する。

3. 応募方法、結果発表、発表後の提出書類：

- ① 次の書類を6月16日から30日までの期間に、国際委員会 (international@jaas.gr.jp) 宛に送ること。応募メールの件名を「JAAS 海外渡航奨励金応募」と明記すること。
 - (1) 履歴書
 - (2) 業績書
 - (3) 発表が受け入れられたことを証明する文書(電子メール可)
 - (4) 発表のタイトルと要旨(英語で250-300語程度とする)
 - (5) (ASA, ASAK, OAH 以外での発表の場合のみ) 当該国際学会やシンポジウムに関する情報(目的、歴史、規模等、字数は指定しないが、簡潔で正確であること)
 - (6) 理由書(奨励金を必要とする理由。他組織からの援助のないものを原則として優先するので、申請時にほかの組織による援助を申請中か、あるいは援助を受けることが決定した者は、その旨明記すること。ほかの組織による援助のなかには、所属機関の研究費を充当する予定も含む。なお、旅費・宿泊費(実費)の不足部分に限り、他の補助金との併用が認められる。)
- ② 審査結果は、7月中に応募者に通知し、学会HPで公表する。
- ③ 発表終了後、2週間以内に報告書(邦語1200字程度あるいは英語500語程度とする)および領収書の原本(旅費・宿泊費)を提出すること。

4. 支給額：

アジア圏の場合は一人5万円、アジア圏外の場合は一人15万円を原則とする。

国際委員会 (international@jaas.gr.jp)

小檜山ルイ 著

『帝国の福音——ルーシー・ピーボディとアメリカの海外伝道』

(東京大学出版会, 2019年, 9,680円)

恐ろしい本である。読者は、心を尽くして大事に育ててきた小さな愛玩動物が、次第に成長して大きく変貌を遂げ、最後には化け物となって今にも飛びかかりそうな気配を感じつつ、本書を閉じることになる。主人公のルーシー・ピーボディは、バプテスト宣教師の妻としてインドへ赴き、夫を亡くして帰国、子育てをしながら婦人伝道局の職員として働き、再婚して裕福な有閑夫人となり、東洋に女子大学を建設する募金運動に携わり、晩年はファンダメンタリストとなって、禁酒法を擁護する政治運動に挺身した。本書は、その生涯を追った一種の伝記ものと言えるが、その生涯は19世紀後半から20世紀前半までのアメリカを観察する定点観測的なパースペクティブを提供し、海外宣教という事業を通して、与える者と受ける者、支配する者とされる者、白人と現地人、恩恵と搾取、政治と宗教、文化と福音といったさまざまな権力と覇権の構造を照射する。400頁を超す長編は、はじめ丹念に収集された些細な史料に圧倒され、その含意を訝しみつつ読み進めると、やがていくつもの伏線が収束を始め、終盤に至ってそれらが一挙に爆発する、というヒッチコック的な物語になっている。

戦慄の主題は、温厚で寛容な白人の伝統的キリスト教が、いかにして狭量で独善的で攻撃的な原理主義者に変貌したのか、という問いである。本書の示唆するところによれば、実はそこには何の不思議も変節もない。彼らは、はじめから白人西洋文明の絶対的な優位性を信じていた。だからこそ、当初は遠い異国の野蛮な異教徒に手を差し伸べて恩恵を与えることもできたが、その優位性が宗教・文化・政治・経済において次第に脅かされる事態になり、怒れるアメリカに転じたのも、結局は自己の優位性を当然の前提として信じていたからに他ならない。海外伝道は、伝道地からの逆影響が本国を変えるといふブーメラン現象の直撃を受けて、アメリカのキリスト教がリベラリストとファンダメンタリストに二極分解してゆく最先端の現場であった。

帝国主義との関わりは複雑である。現地白人の振る舞いを手厳しく批判したのが宣教師であったことなど、著者の長年の研究の蓄積が各所に生かされている。女性参政権をめぐる逆説も辛辣で哀しい。19世紀の女性は、政治に直接関与できなかったため、私心なく資金集めに奔走し、政治闘争から距離を置いた中立的な存在として、確固たる道徳的な権威をもっていた。だが20世紀に入って参政権を獲得すると、政治闘争に巻き込まれてこの超越的な権威を失い、逆に影響力を失ってゆくのである。

各章扉の図版も貴重である。晩年のある写真は、「敗北した白人中流層の無念と自らの目標への執念、そして社会的孤立」を映し出しており、「ほとんどKKKを彷彿とさせる」ほどである。今日われわれが目にしてアメリカ社会のトランプ化が、ここに黒々とした輪郭をあらわしている。

森本あんり (国際基督教大学)

油井大三郎 著

『平和を我らに——越境するベトナム反戦の声』

(岩波書店, 2019年, 2,640円)

「平和を我らに」という歌をジョン・レノンが発表して50年目にあたる2019年に刊行された本書は、「シリーズ日本の中の世界史」の一環として、日米両国内でのベトナム反戦運動史を、特定の党派に限定させずに多様なグループの動向を網羅して構成されたものである。

第I章で反植民地主義と冷戦の論理のあいだを揺れ動く米国のインドシナ政策を概観したのち、第II章から、第二次大戦後から1964年のトンキン湾事件までの時期における冷戦状況および日米国内での反戦平和運動について本格的に論じている。核兵器の登場によって、ストックホルム・アピール署名運動に代表されるような国際社会での反核の動きが胎動するなかで、日米両国における平和運動も反核の文脈を帯びていく経緯が主に叙述されている。第III章は、1965年の北爆開始から1967年までの時期において日米両国の平和運動がベトナム反戦を掲げていく経緯(米国では「ベトナム戦争終結全国調整委員会」、日本ではベ平連)について詳細に論じている。日米両国において共通してみられたのは、各団体の党派性やスタンスを乗り越えて、「ベトナム反戦」というウイニシユで共闘していくことの困難さである。それでもベ平連が中心となって1966年に東京で開催した「日米市民会議」は、国家の壁をこえた連帯を示す事例となったという。

第IV章は、米国におけるベトナム戦争に対する支持率において反対が賛成を上回るようになる1967年からジュネーブ和平協定締結に伴う米軍のベトナム撤退が開始する1973年までの時期を扱い、日米におけるベトナム反戦運動が最高潮に達している経緯を扱っている。そのなかで中心的に論じられているのは、世界各国で開催された10月21日の「国際反戦デー」の動きである。ただ、米国ではペンタゴン突入を試みる一部のSDS(民主社会を求める学生組織)メンバーの登場、日本では学生と機動隊との衝突(新宿「騒乱」)といった急進的な動きも登場し、運動を分裂・停滞させた要因にもなったことにも触れている。

こうした社会運動のもつ限界性にふれつつも、著者はエビログにて、日米においてベトナム反戦の大衆運動が大規模に展開されたことや、ベトナムへのまなざしが、日米両国における学術研究(米国ではニューレフト史学・世界システム論、日本では第二次大戦における日本の加害性の自覚・ベトナム研究)が活性化する契機となったことの意義を強調して本書を閉じる。

「平和を我らに」発表から1か月後に開催された、若者の平和の祭典といわれたウッドストック音楽祭にてジミ・ヘンドリックスは、歪ませたギターで「星条旗」を演奏した。あの歪みは「空爆に苦しむベトナム」を表現したものであるとジミは語っていたが、その空爆(や軍事にともなう暴力)は今もなお世界のどこかで展開されている。本書は、いつまでも変わろうとしない政治・社会状況のなかで、現代のわれわれの在り方の再考を促す一冊となろう。

池上大祐 (琉球大学)

森 仁志 著
『越境の野球史

——日米スポーツ交流とハワイ日系二世』

(関西大学出版部, 2018年, 2,090円)

野球という近代チームスポーツが19世紀を通じてアメリカにおいて組織化・普及し、世紀転換期には「アメリカの国民的スポーツ」としての地位をすでに確立していたことは広く知られている。その野球が日米関係史においても重要な役割を果たしてきたことも、R・ホウインティングによる一般書『菊とバット』を嚆矢として、数多くの論考において明らかにされてきた。本書はその豊富な文献蓄積に依拠しつつ、ハワイの日系人社会の形成と貢献という分析視角を前景化することによって、野球を通じる日米文化交流史研究に新たな貢献をしようとするものである。

著者はまず野球の起源説をめぐる論争を概観したのち、ハワイの日系人社会の形成を、王国から独立共和国、そしてアメリカの準州へと変化していくハワイの歴史転換期を背景にたどっていく。気軽な海外渡航先としてハワイは多くの日本人に親しまれているが、日米両国の帝国主義的拡張の対象としてのハワイの歴史の暗部を知る日本人は驚くほど少ないのではないだろうか。ハワイ＝日本の真珠湾攻撃または常夏の観光地という短絡的な図式によってのみハワイが理解されることが多いアメリカ社会においても同様である。その意味で、19世紀中葉以降のハワイの二つの帝国の周縁部としての歴史と、近代日本の海外移住史を関連づけて紹介する本書が持つ啓発的意義は大きい。

日米両国を出自とする多様な歴史的アクターが登場するのも、本書の特色である。著者は20世紀初頭にホノルルで結成された日系二世チーム・ハワイ朝日や、日本本土の大学野球チームのハワイ遠征を、現地日系人新聞記事等の精査を通して描き出す。永田陽一の研究でも注目されたように、日系二世選手の日米布をまたぐ野球行脚は、プロを含む日米野球交流が活発化した戦間期の日米野球交流史を彩るものであり、ハワイという太平洋海上交通の要所が日米関係史において果たした役割を文化社会面から照射する。そしてそこでは、アメリカの白人社会から向けられる差別、ハワイという多民族社会におけるアイデンティティ形成という位相においても、野球がハワイ日系人社会にとって大きな意味を持つ文化営為であったことが明らかにされる。

本書は第二次世界大戦中の日系人社会の複雑多様な経験、アメリカの軍事前哨基地・ハワイの大戦中の変容を辿ったのち、戦後の日米関係の復旧過程で野球という「共有された文化」が果たした役割を明らかにしつつ論考を終える。戦後初めてプロチームとして占領軍本部の支援のもと日本を訪問したサンフランシスコ・シールズの遠征の実現に奔走した日系二世のキャビー原田や、戦後日本プロ野球の再建に資した日系二世選手の活躍など、英語の先行研究で明らかにされてきた野球をめぐる日米関係新時代の脈動が流麗な筆致で描かれており、日本の読者に広く読まれることが期待される。

清水さゆり (ライス大学)

上杉 忍 著
『ハリエット・タブマン

——「モーゼ」と呼ばれた黒人女性』

(新曜社, 2019年, 3,520円)

伝記や評伝が出版される経緯には、しばしば著者の個人的な執筆動機とはいささか離れた事情が作用している。本書についていえば、今世紀に入ってアメリカ国内で本格的なハリエット・タブマン研究が進んだことや、2016年4月に新たな20ドル紙幣を彼女の肖像で飾ることが発表されたことを挙げられよう。ただし後者に関しては、トランプ政権の誕生を機に実現の見通しが暗くなり、2019年5月には技術的問題を理由に2028年までの先送りが表明された。私たちはこの背後に、近年のアメリカ合衆国における「承認を巡る政治」の新たな局面を想像してしまう。アメリカの国際的地位の相対的低下や経済状況の悪化を背景に、自己承認の不安を深める「マジョリティ」が、「マイノリティ」の承認要求や多文化主義の建前を公然と拒否し始めた状況は、日本でもよく知られている。現代アメリカ社会の「分断」は確実に深まっているかに見える。

こうした時流にあって、本書で展開されるハリエット・タブマンの生涯の物語は、私たち読者に何を気付かせてくれるのだろうか。奴隷制が斜陽化する19世紀前半のメリーランド州南東部に奴隷として生まれたアラミンタ・ロスは、結婚を機にハリエット・タブマンと改名し、逃亡後は地下鉄道運動の活動家として数多くの奴隷逃亡を導くと、南北戦争下では連邦軍の軍事作戦支援や奴隷の生活支援に携わり、さらに戦後は苦境にある黒人同胞の保護を目的とした保護施設の設立に奔走した。著者によれば、その生涯を通じた精力的な活動が多くの成果を上げるには、「黒人女性」というタブマンの「属性」が不可欠だった。

このような一見した「黒人女性の物語」を読む私たちは、ともすれば現在のアメリカに進む分断の構図をそこに重ね合わせて理解してしまうかもしれない。しかしながら、本書が描く「人間タブマン」は、そうした一面的な理解に更なる奥行きを与えてくれる。偶然性に満ちたタブマンの生涯は、人種の別を問わない周囲の多様な人々との関係の所産であった。社会の分断が自明であるはずの奴隷制下においてさえ、思想信条や利害関係、また日常生活に根差す意識の複雑な絡み合いは、時として人々を「属性」のステレオタイプから逸脱した行動へ導き、彼女の人生を大きく左右した。あくまでそうした人々との繋がりの中で、タブマンの偉業は成し遂げられたことを本書は教えてくれる。

「私は一度しか死ぬことができない」をモットーに「同胞」支援に生涯を捧げたタブマンは、一方で終生を文盲で過ごし、アイデンティティの基礎である自らの出生年についても無関心であったという。「承認を巡る政治」が熱を帯びる現代アメリカ社会において、こうした彼女の存在に注目が集まる意味や意義を問うことは、アメリカ研究の大切な課題といえよう。

朝立康太郎 (西南学院大学)

『アメリカ研究』第55号「自由投稿論文」募集のお知らせ

学会機関誌『アメリカ研究』（年報）は2021年3月に第55号を刊行する予定です。会員諸氏の積極的な投稿をお待ちしています。

1. 内 容 アメリカ研究に関する未発表論文。前年度『アメリカ研究』もしくは『英文ジャーナル』に論文が掲載された方は、本年度の投稿をご遠慮ください。また、同じ年度に、あるいは年度をまたいで『アメリカ研究』と『英文ジャーナル』の双方に投稿することはできません。これはなるべく多くの会員に発表の機会を提供するためです。
2. 枚 数 論文は33字×34行のレイアウトで19ページ以内（註を含む）。
執筆要項は学会ウェブサイトを参照のこと。http://www.jaas.gr.jp/journal_guide.html
3. 原稿締め切り 2020年8月31日（月）
4. 提 出 電子メールで年報編集委員会宛て（nenpo@jaas.gr.jp）にお送りください。

* 投稿希望者は、論文題目を2020年6月末日までに電子メールで、年報編集委員会宛て（nenpo@jaas.gr.jp）にお申し込みください。

年報編集委員会

『アメリカ研究』第55号「特集論文」募集のお知らせ

『アメリカ研究』第55号の特集テーマは「貧困」です。趣意は以下の通りです。

ジョン・ガルブレイスは、1958年に『豊かな社会（*The Affluent Society*）』を著し、合衆国には、もはや貧困問題は存在しないと論じた。ルイス・ハーツは『アメリカ自由主義の伝統』（1955年）において、合衆国には自由主義思想しか存在しないと説いている。彼は、ドイツの経済学者ヴェルナー・ゾンバルトが1906年に著した「アメリカ合衆国にはなぜ社会主義が存在しないか」という論文を念頭において、合衆国には貧困の問題が存在したことがなかったこと、すなわち、職人や労働者までもが財産所有者であったことが、社会主義が受け入れられなかった理由であるとのべている。また、ハンナ・アーレントは、『革命について』（1963年）のなかで、アメリカ革命においては、フランス革命やロシア革命とは異なり、貧困が解決すべき問題ではなかったために、自由を維持するための社会の建設ができたと論じている。

では、合衆国には、「貧困」は存在せず、政治・経済・社会・文化に影響を及ぼすことはなかったのだろうか。アプトン・シンクレア『ジャングル』（1906年）は、19世紀末のポピュリズム以来問われていた階級分化のなかで貧困化する労働者の実態なしには書かれることはなかっただろうし、アースキン・コールドウェル『タバコ・ロード』（1932年）やジョン・スタインバック『怒りの葡萄』（1939年）は、南部のプア・ホワイトを描いている。「貧困」は、「豊かさ」とともに、アメリカ社会のある特質を表現している現象であった。

ニューディール政策は、「貧困」から生じる諸問題の解決をめざし、一定の成果を取めたといえる。しかし、マイケル・ハリントンは1962年に公刊した『もう一つのアメリカ』において、アメリカには、貧困状態にある人びとが住む「目に見えない国（invisible land）」があり、そこには全人口の25パーセントがいてと論じた。ジョンソン政権が「貧困との戦い」とよばれる政策を開始したのは、この書物のメッセージを受けとめたためであるといわれている。

1981年に誕生したレーガン政権以降、合衆国における貧困層は拡大し、貧富の差も大きくなっている。トランプ現象は、白人の下層階級の貧困化を射程に入れなければ、捉えることができない。実際、『ヒルビリー・エレジー』など、それをめぐってのいくつかの作品も刊行されてきている。

しかしながら、「ジェンダー」、「エスニシティ」、「人種」にくらべるならば、「貧困」をめぐるテーマは、日本のアメリカ研究において十分に考察されてきたテーマであるとはいいがたい。年報『アメリカ研究』第55号は、「貧困」を特集論文のテーマとして取り上げ、この視点から見えてくるアメリカ像を会員諸氏の共有に付すとともに、この視点に立つアメリカ研究を日本で活性化させることを企図している。

*「特集論文」に応募希望の会員は、2020年6月末日までに、氏名・所属・論文題目および構想・資料などの説明（400字程度）を電子メールで、年報編集委員会宛て（nenpo@jaas.gr.jp）にお申し込みください。その際のタイトルは「『アメリカ研究』特集応募」と明記してください。執筆要項は学会ウェブサイトを参照のこと。

http://www.jaas.gr.jp/journal_guide.html 原稿締め切りは2020年8月31日（月）。

年報編集委員会

新入会員 (2020年3月1日現在)

| | | |
|---------------------|----------------------------------|-------|
| 富田晃正 | 埼玉大学 | 政 日 |
| キムユンホ | 神戸大学(院) | 政 外 日 |
| Glisic, Jelena | インド太平洋問題研究所 | 史 |
| 五井結基 | 白百合女子大学(院) | 文 化 衆 |
| 子守健康 | 大阪大学(院) | 史 |
| 阿部碧 | 一橋大学(院) | 史 社 化 |
| 横大道聡 | 慶応義塾大学 | 法 政 |
| Robins, Roger Glenn | 東京大学 | 政 史 宗 |
| Goldstein, David S. | University of Washington Bothell | 類 文 |
| Griffith, Sarah | Queens University of Charlotte | 史 社 |
| 井上博之 | 東京大学 | 文 芸 衆 |

(* 入会申し込み順。専門領域の略記については、PDF版会員名簿作成用アンケートおよび学会ウェブサイトに記載されている新表記法による)

会員のみなさまにお願い

ご住所・所属等の変更が生じた場合には、速やかに事務局 (office@jaas.gr.jp) までお知らせください。また、メールアドレスを登録されていない方は、極力ご登録くださいますようお願いいたします。

事務局

編集後記

2月に調査で渡米した際に、コロラド・スプリングスを訪れた。そこで、食事をするのに友人に連れられて行ったのが、Ivywild Schoolという元小学校であった。2009年に廃校になった後に醸造所が移転し、食堂や店も作られ、近所の人たちが集まる場所となっている。居住地が郊外に広がっている一方でダウンタウンに集合住宅を作るなど住宅地の再編が生じ、周辺の人口が減って廃校になったとのことだった。数年後には近くで住宅地が開発されるため新たな小学校ができるとの話も聞き、急激な少子高齢化が原因での日本の小学校廃校とは少し様子が違うようであった。

(中島 醸)

2020年4月30日 発行

アメリカ学会

〒550-0001 大阪市西区土佐堀1丁目4-8

日栄ビル703A

あゆみコーポレーション内

Tel: 06-6441-5260 Fax: 06-6441-2055

http://www.jaas.gr.jp

発行人 高橋 裕子

編集人 中野 勝郎

印刷所 (株)国際文献社

〒162-0801 新宿区山吹町358-5